



大学生を対象とした能の授業に関する考察：
能の学習プログラムの構築に向けて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中西, 紗織 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008446

大学生を対象とした能の授業に関する考察 ー能の学習プログラムの構築に向けてー

中西 紗 織

北海道教育大学釧路校音楽教育講座

Noh Lecture and Practice for the University Students: Developing a learning program of Noh

Saori NAKANISHI

Department of Music Education, Hokkaido University of Education, Kushiro Campus

要 旨

本稿の目的は、筆者がこれまでに行った大学生を対象とした能の授業での学習者の学びについての考察を通し、学習者が日本の伝統芸能の一つである能への理解をより深め、自国の文化をより深く知ること、多様な文化の理解への視野も広げられるような能の学習プログラムの構築を展望することである。筆者が現在所属する大学の小学校教員養成課程において有効な能の学習プログラム開発への指針や具体的方法もについて検討し、大学生を対象とした能の学習プログラムのための具体的な指針を示すことを試みた。

キーワード：音楽教育 大学生 歌舞劇としての能 「流れ」「わざ」の伝承

はじめに

本稿の目的は、筆者がこれまでに行った大学生を対象とした能の授業での学習者の学びについての考察を通し、学習者が日本の伝統芸能の一つである能への理解をより深め、自国の文化をより深く知ること、多様な文化を理解するための視野も広げられるような能の学習プログラムの構築を展望することである。そしてさらに筆者が現在所属する大学の小学校教員養成課程において有効な能の学習プログラム開発への指針や具体的方法を探ることも視野に入りたいと考えている。

筆者は、能において「わざ」がどのように習得されているのかということについて、その過程の図式化と「流れ」という概念による説明を試み(中西 2008)、そこである程度かたちになってきたものを音楽教育の場にどのように生かしていくことができるか考え続けている。能の「わざ」の習得過程の解明についてはまだ多くの課題を残しており研究途上であるが、「わざ」の習得の意義については次のように考えている。「わざ」の習得の意義は、常に今の自分の立っている位置を超えたいという意思が生じること、即ち次の段階を志向せずにはおかない認識の活動にある。常に新たな局面を目指してそのような認識の活動が絶えないことが、内側からおのずと生じる動き、すなわち「流れ」である。「流れ」が生じるプロセスは、生田久美子がノディ

ングズの言葉をひいて「取りつかれたかのように主体的に関与する」(生田, 北村 2011, 24～28)と説明している状態と関連させて理解することができよう。

学習者たちが自国の文化への理解を一層深め、それを次の世代へ伝えようとするのも「流れ」をつないでいくことに他ならない。その「流れ」も含めた「わざ」を伝承するために、大学生のための能の学習の導入に際して重要なことは次の三点だと筆者は考えている。

- ①能の実演家を招き、直接指導を受ける。
- ②学生が能の実演家の稽古場を訪問する¹。
- ③能の実演家と大学教員が連携・協力して学生のための能の指導を行う。

1998年告示の学習指導要領改訂以来、2008年の改訂を経て現行においても例えば中学校の学習指導要領音楽編には、3年間を通じて1種類以上の和楽器を用いるようにと記され、小学校においても和楽器や日本の伝統音楽・伝統芸能を取り扱った授業が一層増えつつある²。中でも、総合芸術的な音楽劇としての能の学習は、能を形づくるさまざまな要素が伝承の方法とともに伝えられてきたことで、学習者の興味や関心に強く訴え、学習者の想像力・創造力・表現力を大いに育むものである。小学校と中学校の音楽科の目標に「豊かな情操を養う」とある。ここに述べたことは、まさに「豊かな情操を養う」ことにつながっていくこ

とだといえよう。

本稿では、第1章において先行事例・先行研究としての能の授業実践を取り上げ、第2章で大学生を対象としてこれまでに筆者が行った能の授業について分析・検討する。そして第3章において大学生を対象とした能の学習プログラム構築への方向性を提示する。

1. 能の授業の先行事例, 先行研究

本章では、能の授業の先行事例, 先行研究として、小・中学校と大学における授業などを取り上げる。

1-1 小・中学校における能の授業

学校教育における日本の伝統音楽の授業については、日本学校音楽教育実践学会編(2001)『日本音楽を学校で教えるということ』に小学校から高等学校において実際に行われた授業が取り上げられ、その内容は、遊び歌、だんじり囃子、雅楽、能、箏曲、日本音楽をつくる活動など多岐にわたっている。この中で意義深いことは、これまで伝えられてきた伝統音楽については可能な限りそれが伝えられ学ばれてきた方法によって学習しようというあり方が主張されている点と、児童や生徒をその伝承と創造の担い手として位置づけている点である。そして、学習指導要領の変遷や授業実践の傾向の変化に照らして、21世紀の学校教育における日本の伝統音楽の価値や、児童・生徒と伝統音楽との関わりを見据えた実践的な授業論が展開されている。

この中で能の授業については小暮朋佳が「他の表現媒体と共に——歌舞伎・能の学習を中心として——」の中で、小学校5年生を対象として、能《船弁慶》の後場の子方が謡う大乗拍子³や《シンデレラ～恨之伝》⁴の実演を出発点とし、子どもが言葉・謡・舞をつくり、それに囃子をつけるという学習活動を紹介している。そして、小暮は、伝統音楽において特徴的な語りの演劇性にも触れ、それを身体を通して体験することで、「つくる」という内側からの積極的な活動によって「伝統を自分たちの今と共振させて楽しむことができる」(日本学校音楽教育実践学会編 2011, 134)と述べている。

中学校における能の授業に関する研究としては、金沢市の中学校教諭のグループが「能の音楽の教材化～豊かな感性の育成をめざして～」というテーマによって行った共同研究(金沢市中学校教育研究会音楽部会 2004)がある。これは、加賀宝生といわれる独自の特色をもつ宝生流が根付いている地域性を生かしつつ、教師自身が研究と体験の両面から能への理解を深め、実践的な能の教材化をはかるという、非常に意義深い研究である。明確な目標を掲げた授業実践への生徒の反応を丁寧に詳細に分析し、多様な視点から能の教材化の意味を考慮して具体的な学習活動に結びつけており、大学の教員養成課程の能の授業を考える上でも貴重な示唆に富んでいる。

1-2 大学における能の授業

筆者が最終的に構築したい学習プログラムは、大学生を対象としたものであり、学生たちが教える立場になった時のことを視野に入れたいと考えている。そこで、次に先行事例として、大学の教員養成課程における能に関する二つの授業実践をあげる。

垣内幸夫は、教員養成大学において、小学校教員志望の学生たちの将来の授業に結びつくような構想を立て、能を題材とした授業を行っている。そこでは、指導者(大学教員)による指導以外に、能楽師を招いての謡・仕舞・小鼓の実技があり、能独特のリズム構造も教授されている。また、注目したいのは、学生が自らの手で、能の入門書の小冊子、扇、見台、能面を製作したということである。このような学習活動は、学生たちの能への関心や理解を深めるだけではなく、将来へ継続していく貴重な活動であり、筆者も大いに参考にしたい内容である(垣内 1987, 144～153)。

また、教員養成大学における謡曲学習の実践効果については尾藤弥生が継続的に行っている研究がある。尾藤は将来教師を目指す音楽専攻の大学生を対象として行った大学教員の指導による学習と能楽師を招いた謡の体験学習について、詳細な調査項目を設けて調査を行っている。そこでは、学習者が謡曲の内容や日本の「声」の文化としての謡曲の魅力や価値を認め、基礎的技術の習得と表現技術の知覚・感受・理解が深まったという効果が結論として示されている。また将来謡曲を通して子どもたちに伝えたいこととして「日本の文化の素晴らしさ」「日本独自の声の出し方、振る舞い方、表現などがあって、それが文化をつくっていること」「ゆっくりなテンポのよさ」など、学習者の継続的学習・教授の意欲も示されている(尾藤 2008, 59～73)。

いずれの事例も、指導者の経験を活かし、綿密な計画の上に行われた授業であり、豊かな学習活動がそこに展開されており、筆者も取り入れたい点が多かった。特に、学習者の能との関わり方の意識を高める様々な工夫が大いに参考になった。

1-3 音楽学と音楽教育を結ぶ伝統音楽に関する実践的研究

もう一つ、音楽学の視点から日本の伝統音楽の実践を捉えた研究をあげておきたい。久保田敏子・藤田隆則編(2008)『日本の伝統音楽を伝える価値——教育現場と日本音楽——』は、「音楽学者が、音楽教育の現場に対して何が言えるだろうか」ということから出発し、教育や音楽教育を目指す学生、現場の教員、音楽教育学を専門とする人々など幅広い読者を対象として書かれ、教育現場における伝統音楽の扱いの一層の重視に応える書である。全体を通して注目したいのは、伝統音楽に関するさまざまなことを「伝える」という視点である。

第3章「実践で知る音楽のしくみ」の第3節で、藤田隆

則は「謡——能の音曲——」と題して、《高砂》と《羽衣》の一部を例として、謡の発声、発音、リズムなど、謡の特徴について簡潔に説明している。ここにあげられたいくつかの課題は、能の謡の特徴や表現方法への理解を深めるものであり、そのような目標を達成するための、授業での具体的活動を考える上で明確な方向性を示している。

2. 筆者の指導による能の授業

本章では、大学生を対象としてこれまでに筆者が行った能の授業について考察する。

2-1 大学生を対象とした能の授業から

能の映像を見たり、能の実技を体験したりすることから見てとれる大学生の学びは実に多様である。面や装束などの視覚的要素から囃子や謡などの音楽的特徴、「間」についてなど、さまざまな着眼点から各自能への理解を深めている。ここに示すのは、常葉学園短期大学（静岡県）の音楽科において2003年度から2009年度までの間に筆者が行った「民族・日本音楽概説」の中の能の授業に関する考察である⁵。前期開設科目であり、全15回のうち2回が能に関する授業である。学生の感想文の内容分析を行い、学生の着眼点と能の要素に焦点をあてて分類し、以下の項目に整理してみた。

- (1) 詞章・ストーリーに関するもの
- (2) 音楽的要素に関するもの
- (3) 舞台・装束・面などに関するもの
- (4) 所作・動き・表現に関するもの
- (5) 役柄・演出に関するもの
- (6) 日本らしさの発見・自国の文化という意識
- (7) その他——能楽堂に行ってみたい、実際に能を見たい、など

筆者は音楽教育の視点からの能の学習プログラムを考えており、声と「身体」、「自国の文化」ということを特に重視したいので、ここでは上記の(2)、(4)、(6)について考察する。

(2) 音楽的要素に関するもの

笛の音（「笛の音が恐かった」「笛の音がとてもきれいだった」などのコメントあり）への関心が高く、特にヒシギという高音への反応が強かった。また、楽器の形状、奏法、音色の違い、謡の発声法、音階、掛ケ声や間による独特のリズム感に関すること、演奏形態など、音楽科の学生ならではの知識や経験に基づいたコメントが多く見られた。

謡については、声明と似ているというコメントがあった。能の授業の前にすでに声明を取り上げていたので、能以前の日本の声楽様式と能の謡との影響関係や、日本の声楽様式の特徴を知る機会にもなったようだ。また、発声法、音階、リズム、テンポ、謡本の記号への興味など、疑問も

含めてさまざまなコメントが見られた。そのようなコメントのよりどころとなっているのは、学生たちが音楽的基礎として身につけている西洋的方法である。つまり、学生の多くは西洋音楽の理論や方法に基づいて能の音楽を捉えている。そのことは、「何故あんな風に震えた声でメロディとも何ともいえないリズムに乗せて台詞を言うのがとても不思議でした」とか、例年よく観察される、「ヴィブラートが真似できない」、「音程がよくわからない」、「今は微分音？」というような発言からもうかがわれる。しかし、以上のようなコメントや発言の多くは、「不思議。だけれども面白い」「音程がとれない。でも思いつき声を出すのは楽しい」という、拒絶ではない反応である。このような学生たちの態度は、指導者の示し方、与え方次第で次の学習段階への発展性をもつものであると筆者は受けとめており、学習のプロセスに「流れ」を生じさせるものだといえよう。

能の謡の要素として、声の張り具合や息の使い方はもちろん、役柄の位⁶、場面や心情、その能がどういう曲柄なのかといったことも声の表現と深く関わっているということを伝えられればと思う⁷。世阿弥は『花鏡』の中で「舞は声を根となす（舞声為根）」（表・加藤 1974, 86）と言っている。世阿弥によると「舞歌二曲」つまり舞と謡が能のあらゆる稽古の基本となるもので、このことは現代の稽古にも通用することなのだが、舞と謡の関係とはといえば、舞は謡に基礎をなすということである。謡、つまり声による表現から身体の動きが自然と出てくる。そのことを深く考慮することは、学習プログラム構築の柱の一つとして重要である。

能の声における「流れ」を考慮するとすれば、学生たちが身につけている声の出し方や声の使い方の「流れ」を、どのように能の声の「流れ」と共振させていくかということも学習プログラム構築への課題の一つである。

「間」のことや「ずっと同じ音楽が流れていた」というコメントも見られた。「間」については、能においてだけでなく、日本の伝統音楽全般において重要な要素であり、日本的美とも結びついている考え方なので、慎重に取り上げたいと思った。「ずっと同じ音楽…」は、筆者が実演した舞囃子《楊貴妃》の中の〈序ノ舞〉へのコメントであり、舞囃子の形式での実演をするとよく見られるものである。能の音楽、特に囃子の音楽は、分解してみると同じパターン組み合わせや繰り返しによってできている部分が多い。同じに聴こえるという捉え方から出発して、能の音楽的構造や特徴への気づきを促すことができよう。

(4) 「所作・動き・表現」に関するもの

「所作・動き・表現」に関する学生の感想や指摘は実に多様で示唆に富んでいる。また、映像資料だけでは見えない、あるいは気づかないことに学生の関心が向くために、実演による鑑賞は有効である。2004年度以降、簡単な謡と所作を体験する時間を設けた結果、見ているだけよりも演

じたほうが楽しい、足腰がつかった、能への理解が深まった、想像していたよりも能はずっと面白いなど、実感に満ちた感想を得た。

能のハコビ(摺り足)について、「能を見て気づいたのは、体はほとんど動いてなくて、足が重要なのかなと思った。音に合わせて足をふみつけたり、歩く時も歩き方が決まっています、足音がしないと聞いた」というコメントが見られた。「ハコビ」の芸術といわれる能の身体表現の特徴への気づきである。このことを学習者が実感することは、体験に際して身体の「流れ」の認識へとつながる重要なものである。

また、筆者の実演について「姿勢がよかった。かっこいいなあと思った。」「終わった後いつもの先生に戻って安心した。」「舞いももちろんかっこよかったです、声も非常に響く美しい声でとても感動しました。」という有り難いコメントを得た。指導者自身が実演することは、学生たちが実技を体験する上で、彼らのモチベーションを大いに高めるのに効果的である。学生たちは「かっこいい」と思えるものには敏感に反応する。「かっこいい」とか「きれい」「美しい」と感じた気持ちを「真似をしてみたい」「私もできるようになりたい」という方向へ発展させられればと思う。

(5) 日本らしさの発見・自国の文化という意識

「動きの一つ一つが丁寧で、能は見てみると、昔の人が能を大切に思っていたのがしみじみと感じられる。」「能を理解するのは日本人の私にとっても難しかったです。もっと自分の国の文化を理解できるようになりたいです。」など、自国の文化のよさを再発見した、日本の文化はずごいというような感想も多い。能を一つの入り口として自国の文化への理解を深め、学習者各自が自分なりの発見のしかたで能のよさをとらえ、自信をもってそれを伝えていけることへつながるような発展性を考慮したい。そのために伝承の中に身を置いてみる、あるいは伝承の「流れ」の一部になっていると実感できる体験、例えば「虫干し」⁸の行事に参加することなどを授業に組み入れることができればと考えている。

2-2 所作の体験と「流れ」

ここでは、専門学校東京ミュージック&メディアアーツ尚美の卒業生4名を対象として2006年3月から2007年9月まで行った能の学習・体験プログラム「こまちのかい」⁹での活動の一部について述べる。

能楽堂での能鑑賞、虫干し体験、稽古見学、体験稽古を除いて、各回約120分。全23回の内容は、大きく下記の三つに分かれる。講義形式で行ったものについては各回のテーマを記しておく。

- ・講義(筆者の実演1回含む)計9回(第1~3, 8, 9, 14, 15, 18, 23回)

能の成り立ち・構造・技法—《翁》に見る能の特徴、能のドラマと表現—《船弁慶》を例として、能の謡と所作体験、能の物語—《道成寺》をめぐる、伝承について、能における「わざ」と身体、「わざ」を見る、体験稽古の上映会、まとめ—能における身体の「流れ」(最終回)

- ・能鑑賞(事前講座1回含む)計11回(第4, 5, 10~13, 17, 19~22回)
- ・体験(稽古見学・虫干し・体験稽古)計3回(第6, 7, 16回)

このうち、第2回「能のドラマと表現—《船弁慶》を例として」(4名出席)では、能《船弁慶》(ビデオ)を鑑賞し、歌舞劇としての能の特徴の具体例を見た。鑑賞前に、静と義経の別れの場面での静の所作シオリを謡いながらやってみた。

シオリという所作は、抽象的なものの多い能の所作の中では最もリアルな表現の部類に入る。「涙をぬぐう」「涙を隠す」というような意味があるといわれ、号泣するような悲しみからは離れた表現ということもできる。4名とも専門学校在学中に筆者の授業を履修しており、この《船弁慶》の中の前ジテ静御前のシオリの映像は一度見ているが、シオリを自分でやってみたのは初めてだった。シオリについてのコメントは以下の通りである(1名はそれについての言及なし)。

A子「シオリの動作と謡を一緒にやってみることで独特のリズムというか、そういうものを感じることができて、とても興味深く思いました。理論だけでなく、やってみる(実際に体験する)ことによって見えてくるものがあるということ、今日は本当に少しやってみただけで感じました。実際に“やってみる”実際に“見てみる”というのは、自分が考えていた以上に説得力があるかもしれないと思いました。やっぱり響いてくるもの(響いてくる場所)が全然ちがうような気がします。」

B子「セリフと型をやったのが面白かった。セリフの意味と動作が重なって表現しているんだなと実感しました。」

C子「感情を直接的に表さないというのが面白いと思いました。自分で泣く動きをしてみた後にビデオを観ると、説明を聞く前と違った見方ができたので、動きを取り入れるのは面白いと思います。」

それぞれのコメントから、体験を通して能の演技の特徴である声と身体による表現の面白さを実感したことが伝わってくる。「自分で泣く動きをしてみた後にビデオを観ると違った見方ができた」と書いたC子に、どのように違ったのかたずねると、「静御前の悲しみの深さが前よりももっと伝わってきた」という答えだった。謡いながらシオリをやってみることで、能の演技の特徴や「独特のリズム」を

感じとただけではなく、能のこの場面と登場人物への思いが一層深まったようだ。

また、第3回「能の謡と所作体験」（3名出席）では、仕舞《志賀》を筆者が実演し、各自扇を構えて、最初のシテの謡、カマエ、ハコビ、サシコミ、ヒラキをやってみた。この日は質問用紙をあらかじめ用意して、それに答えてもらった。以下に一部を記す。

①印象に残ったことはどのようなことですか。

A子「ツヨ吟とヨワ吟のちがいが。声の発声法の特殊性。実際に目の前で聴かせてもらうとすごくよくわかる。」

B子「先生が実際に舞を見せてくれたのに感動しました。能ってもっと動作が少ないと思っていましたが、足の動きや全体の動作、思っていたより動きが大きかったです。」

C子「声を出すのが難しかったことと、自分がやるとカマエが不自然な感じがしたこと。」

②体験してみてどうでしたか。

A子「やっぱり声は難しい。足の動きが面白かったです。すり足は普段使わないのに、能はすり足で動くのは何故だろうと思いました。」

B子「楽しかったです。今までにやる機会もなかったのが新鮮でした。もし生で観る機会があったら、見る意識が変わる気がします。」

C子「謡をやってみると、音程や発音の感じがなかなかつかめなかったのが難しかったです。何人かで合わせる時に、謡いの人は周りとの音の違いが気にならないのかも疑問に思いました。カマエを作ってから歩くのが、こんなに大変だと思わなかったです。」

大学生以上を対象とした授業において能の謡や所作を体験させると必ず、なぜこういう発声法なのか、なぜ摺り足なのか、という素朴な疑問とともに、実際にやってみると見た目よりずっと難しい、というような反応が多く見られる。ここでも、日常的な動きとは異なる、能の身体「流れ」が認識され始めているといえる。また、そのような身体を獲得するのは容易ではないという、「わざ」の世界への「認識活動の活性化」¹⁰が見られる。

容易ではないと認識するとはどういうことか。「どうやらこれは相当の年月をかけないと達成できないことのように」という理解、あるいは、近道はないと実感することである。生田も言っている「身体でわかる」ことの入り口に立ったということになるだろう。このことが最初に述べた能の「わざ」の習得の意義である。

2-3 「伝える」という視点

次に、同じく「こまちのかい」の活動から虫干しにおける装束修繕に参加した時の学習者のコメントを取り上げたい¹¹。

A子「とにかく、たくさんの着物の美しさに、ただただ圧倒されました。眼福です。(中略)昔の日本人の美意識の高さ、そういうことを身をもって実感すると、自分が日本人であることに自然に誇りが持てるものなのですね。

ぬい物を手伝うことによって実際着物（能の装束）をあんなに間近で見られて触れられてものすごく貴重な体験でした。あと思ったのは、ぬい物など作業をしている間に話されている能の話¹²がとても興味深かったということです。あんなふうに能楽師の先生に質問できたり、話を聞いたりできたりするのも面白かったし、感動しました。みなさん、能のことが大好きで、とても大切にしているんだなあ、それにも感動。(中略)

最後に、私はあの能舞台上に上がらせていただいた、という事実自体に相当感動しました。松の絵もすごい間近で見られたし、とっても神聖な気持ちになりました。ふつうの生活でそういう神聖なものへの怖れとか、尊敬みたいなものを感じる機会って少ないと思います。でもそういう気持ちってすごく大事なんじゃないかなあ、と思いました。」

B子「日本の伝統のものをやっている人達は、とても礼儀正しいと感じます。虫干しの現場に行ってみて感じました。装束の修繕は思った以上に難しく、大変でした。ほつれや破けも無数にあって、なかなか上手く出来なくてあまり進められなかったのが残念でした。(中略)

私が修繕したのは頭巾で、前の修繕の跡を見ると、繰り返して直してまた使うというのも日本の伝統かなと思いました。(中略)面の裏を見せてもらった時、何ともいえない迫力と気迫があり、演じてきた人、作り手の思いがこもっている気がしました。翁の面はとても幸せになりそうでした。」

虫干しにおいて、舞台上や見所に干されている多くの装束や面を実際に見たり、装束に直接触れたり、装束を修繕したりする活動は、能を支える多くの人々との関わりやつながりを通して「わざ」の世界が成り立っていることを知るために大変有効であると筆者は考えている。そして、自分が「伝える」まさにその場において、「伝える」プロセスをその場にいる人々と一緒につくり上げていると実感することは、能の「わざ」の習得の中で重要な学びである。

3. 能の学習プログラム構築への方向性

以上のことを踏まえて、本章では学習プログラム構築への現時点での指針を明確にしてみたい。

3-1 テーマ別プログラム・モデル

筆者が能の「わざ」の習得に関する研究の途上で2007年に作成した能のプログラム・モデル1（中西 2008, 94）をひいて、この中のテーマをさらに絞り込んでみたい。ただし、このプログラム・モデルを作成した時の目的や対象

者は以下の通りである。

- ・プロの能楽師養成のためではなく、一般の人ができるだけ合理的に、しかも能の本質から離れないように、「わざ」習得への基盤を形成することが目的である。
- ・対象は、古文読解の基礎知識を有する大学生以上、2～5名の少人数とする。また学習者からの感想・意見・コメントなどを学習内容に反映させ、時間の枠をゆるやかにとって、じっくり立ち止りつつ、時には学習者と話し合いをもって進める。

表1 テーマ別プログラム・モデル1
全30時 1時限約90分(2007年中西作成)

メイン・テーマ	主な学習内容	時 限
1 能舞台から始まる場・時間	能舞台・楽屋・見所の観察と体験	1
2 能の歴史と背景	《翁》 能の歴史・成立背景を知る 世阿弥の演劇論にふれる	3
3 稽古見学	稽古場での人や物との関わり 「流れ」の観察	2
4 カマエ・ハコビ・謡・仕舞	師匠による体験稽古 指導者による実演	2
5 虫干し見学	虫干しされている装束・面などを見学したり、装束の修繕などの作業に参加したりする。人から人への伝承の現場に立ち合う	3
6 能の鑑賞	能楽堂での能鑑賞 演劇的特徴に注目 能の物語と詞章に親しむ	7
7 稽古	「流れ」の理解 「形」と「型」の理解 自分の身体の把握 謡・仕舞の「暗譜」に挑戦	8
8 能楽師へのインタビュー	「わざ」を感じ取る	1
9 能の表現・演技	仕舞の発表 発表についての話し合い	2
10 能に関する経験の共有	家族や友人と能について話し合う	1

本稿冒頭であげた三点と、前章までの考察の結果を合わせると、一つの可能性としてメイン・テーマ中の1, 3, 4, 5, 7, 9, 10に焦点化した活動が考えられるだろう。大学生のための能の学習プログラムを具体化するには、現時点ではまだデータ不足であり、実際に教員養成課程の大学生を対象として能の体験プログラムを実施し、結果を分析し、ある程度時間をかけて検討していく必要がある。ここでは一つの結論として、指針を示すだけにとどめたい。

3-2 能の学習プログラム構築への指針

一部繰り返しになるが、能の授業に関する先行事例や先行研究を見直し、大学で実施した授業の結果を分析し、これまでの考察を振り返った結果、大学生のための能の学習プログラム構築にあたって以下のことが重要な骨格となるといえるだろう。

- ア 学生が能の実演家の稽古場を訪問する
- イ 能の実演家を招き、直接指導を受ける。
- ウ 能の実演家と大学教員が連携・協力して学生のための

能の指導を行う。

- エ 「流れ」を意識する。
- オ 声と「身体」に焦点をあてる。
- カ 自国の文化を意識する。
- キ 「伝える」という視点を重視する。

これらのことを考慮して以下に活動の指針を示す。(これらはア～キと対応しているわけではない。)

- ① 「世界への潜入」——稽古場見学
- ② 能楽師による稽古
- ③ 大学教員による能の指導
- ④ 虫干し見学
- ⑤ 能の表現・演技
- ⑥ 能に関する経験の共有

おわりに

今回は大学生のための能の学習プログラム構築への指針を示したに過ぎない。今後の課題としては、声と「身体」に注目した能の学習活動を考えてみたい。そして、今回示した指針に基づいて、実際に大学生を対象として能の授業を実施し、その結果を分析・再検討して具体的な能の学習プログラム構築へ結び付けたい。

大学においてどのように能の学習を行っていくのが有効なのか。筆者が作成した能の学習プログラム・モデルのどの部分をどのようなかたちで実施するのが大学生にとって将来の「教える・学ぶ」に生きるのか。そしてさらに教員養成課程における学習を視野に入れて、自分たちが身につけたことを子どもたちに伝えるために有効な能の学習プログラムを考える場合、どのような可能性があるのか。これらのことは今後の課題として考え続けたい。

(釧路校講師)

【引用・参考文献】

- 生田久美子 (1987) 『「わざ」から知る』(認知科学選書 14) 東京大学出版会。
- 生田久美子, 北村勝朗編著 (2011) 『わざ言語——感覚の共有を通しての「学び」へ』慶應義塾大学出版会。
- 表章・加藤周一校注 (1974) 『世阿弥 禅竹』(日本思想大系 第24巻) 岩波書店。
- 垣内幸夫 (1987) 「能を学ぶ 教員養成大学に於ける日本伝統音楽の授業を探る」『季刊音楽教育研究』52, 1987年7月, 144～153頁。
- 金沢市中学校教育研究会音楽部会 共同研究 (2004) 「能の音楽の教材化——豊かな感性の育成をめざして」(音楽教育研究報告第23号 助成研究発表論文), 財団法人音楽鑑賞教育振興会発行, 2004年3月。
- 観世鏡之丞 (2000) 『ようこそ能の世界へ 観世鏡之丞能がたり』暮らしの手帖社。
- 観世寿夫 (1981) 『観世寿夫著作集二 仮面の演技』平凡社。
- 久保田敏子, 藤田隆則編 (2008) 『日本の伝統音楽を伝え

る価値——教育現場と日本音楽』京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター、付録CD付。

中西紗織 (2008) 「能における『わざ』の習得に関する研究——事例分析からの学習プログラムの開発を通して——」東京藝術大学大学院音楽研究科、2007年度博士學位論文。

中村多仁子、三井悦子共編 (2005) 『舞踊・武術・スポーツする身体を考える』(スポーツ学選書14) 叢文社。

西平直 (2009) 『世阿弥の稽古哲学』東京大学出版会。

日本学校音楽教育実践学会編 (2001) 『日本音楽を学校で教えるということ』(学校音楽実践シリーズ1) 音楽之友社。

尾籐弥生 (2006) 「謡曲の体験学習の効果に関する一考察」『学校音楽教育研究』第10巻、日本学校音楽教育実践学会、78～79頁。

尾藤弥生 (2008) 「教員養成における『謡曲』学習の実践効果に関する考察」『北海道教育大学紀要(教育科学編)』第59巻第1号、59～73頁。

注

¹ 学習者が稽古場を訪れ、人や物と関わりながらまさにその場の空気を呼吸する意味について生田は『『わざ』世界への潜入』という重要なプロセスとして論じている(生田久美子(1987)『『わざ』から知る』東京大学出版会、67～91頁)。

² 現行の学習指導要領音楽編には次のように記されている。「和楽器の指導については、3学年間を通じて1種類以上の楽器の表現活動を通して、生徒が我が国や郷土の伝統音楽のよさを味わうことができるように工夫すること」(中学校)。鑑賞教材として「和楽器の音楽を含めた我が国の音楽、郷土の音楽、諸外国に伝わる民謡など生活とのかかわりを感じ取りやすい音楽、劇の音楽、人々に長く親しまれている音楽など、いろいろな種類の楽曲」(小学校中学年)。「和楽器の音楽を含めた我が国の音楽や諸外国の音楽など文化とのかかわりを感じ取りやすい音楽、人々に長く親しまれている音楽など、いろいろな種類の楽曲」(小学校高学年)。

³ 能の謡のリズム型の一つで、八音節を八拍子の一拍ずつにあてはめて謡う謡い方。

⁴ 詞章：小暮朋佳、大鼓：手附浅見眞高(シテ方観世流職分)、型付：並木睦枝(日本学校音楽教育実践学会編2001、136)。

⁵ この事例についての詳細は拙稿を参照されたい(中西2008)。

⁶ 能楽において演技・演出全般を規定する理念。演じる人物の役種(シテ、ワキ、アイ、地謡など)と役柄(老人、女、男、僧、神、鬼など)の別を把握し、理解した上でつくられる全体的な表現方法。(西野・羽田1987、305より)

⁷ 筆者は、能の音楽的特徴を西洋音楽の枠組みで捉えるこ

とが常に最良の方法であると主張しているわけではない。観世鍔之丞師は「能をあまりご覧になったことのない、西洋音楽に親しんだ方々に、能の音楽の特徴を説明するのに、例えばバッハやモーツァルトの作品における旋律の繰り返し性や繰り返しによって生じてくることがあるというふうを示すと、能との共通性を少し見つけてもらえるのではないか」(2007年9月17日稽古の折の話)と、あくまでも一つの可能性として語られた。授業においては、学習者の状況に応じて、指導者の示し方、与え方をよくよく工夫すべきであると筆者は考えている。

⁸ 虫干しとは、演能で使っている装束や面、道具類を蔵から出して舞台や見所に広げて風を通し、蔵も燻蒸して虫払いするという夏の行事。装束や道具・小物類で修繕が必要な箇所を直す作業もする。期間や方法はその家によって異なる。筆者は2000年から銕仙会の虫干しで装束修繕のお手伝いをさせていただいている。

⁹ メンバー4名は芸術表現アカデミー学科鍵盤コースピアノ専攻の卒業生。4名のうち2名は大学卒業後専門学校に進学。1名は社会学部社会心理学科卒、1名は文学部英語英文科卒。全員女性であることと、女性能楽師の演じる《卒都婆小町》を鑑賞したことをきっかけとして「こまちのかい」という名称になった。この事例における活動・学習内容とそれについての分析・考察については拙稿を参照されたい(中西2008)。

¹⁰ 生田は、「わざ」の世界に自らを潜入させることによって学ぶべきもの、目指すべきものは、「形」の習得を超えた、学習者の身体全体を通しての認識活動の活性化であるべき、と述べている(生田1987、82～83)。

¹¹ 「こまちのかい」メンバーによる装束修繕の手伝いは筆者の能の師匠観世鍔之丞師のご了解を得て実現した。

¹² 金剛流にのみ伝わる《松山天狗》の復曲上演についての話など。A子は、一緒に装束修繕をしていた女性と師匠が話していたことをその場で聞いて、このように言っている。